

## 桜井万里子・姫岡とし子 対談インタビュー

### 「ジェンダー史学を語る」

クリオ： 本日はお忙しい中、対談インタビューに応じていただき誠にありがとうございます。

本インタビューでは、日本の西洋史学におけるジェンダー史研究を牽引されてこられた桜井万里子先生と姫岡とし子先生をお迎えして、ジェンダー史研究の回顧と展望について語っていただきたいと思います。先生方が高等教育を経て、女性研究者として女性史研究を志されるまでの時期は、第二波フェミニズム運動の高揚をうけて、女性の社会進出や自己実現の幅が広がった時代と重なります。また研究の重心を女性史からジェンダー史へと移される時期には、男女共同参画社会の進展や、フェミニズム運動の沈静化がありました。本日は、お二人がそのような同時代の動きからどのような影響を受けたのかも含めて、女性研究者、そしてジェンダー研究者としての立場からのご感想、ご意見を伺いたいと思います。

#### 1. 研究者を志すまで

クリオ： お二人が研究者を志すまでの歩みについてですが、桜井先生には既に『クリオ』17号でお話を伺っていますので、今回は割愛させていただきたいと思います<sup>1</sup>。そういうわけですのでまずは、この点について姫岡先生にお話しいただくところから、本インタビューを始めたいと思います。

先生が生きてこられた時代や、その中で先生の歩みは、先生の歴史学研究や女性史研究とどのように関わってきたのでしょうか？

姫岡： 私の場合、中学・高校の頃には、一生職業を持って働きたい、ということは考えていましたが、研究者になることは、本当に夢にも考えてはいませんでした。私の父が京都大学の教授で社会学をやっていたものですから<sup>2</sup>、小さいころから家にお弟子さんがよく来ていらっしゃって、今から考えると、誰でも名前を知っているような超一流の、日本を代表するような研究者になった方がたくさんおられました。小学校の頃から、父が母に「あいつはよくできる」とか言うのを聞いていたので、研究者というのは、自分とは次元の違う人になるんだ、という感覚を持っていました。また、父も私が女性だったということもあって、なにも私に対して期待をしなかったようです。

大学進学の際に父から勧められたのは、なんと家政学部で、京都府立大学に短期大学部があるのでそこに行くか、それとも職業に就きたいのであれば、大阪市立大

<sup>1</sup> 「インタビュー：桜井万里子教授に聞く／聞き手：佐藤昇」『クリオ』17号(2003年)

<sup>2</sup> 姫岡勤(京都大学教育学部名誉教授)。業績は数多いが、単著としては『家族社会学論集』(ミネルヴァ書房、1983年)などがある。

学の家政科に行けば、短大の先生ぐらいにはなれる可能性もあるぞ、という具合でした。男性と競争することを考えるよりも、女性独自の道を行ったほうがいいのではないか、ということですね。家政科に行くというのは私の選択肢には全くありませんでした。歴史や社会科が得意科目であったこともあり、職業をやっていくとしたらやはり教師かな、と考えました。そうしますと高校の先生、中学の先生ということになりますけれども、社会科の高校教師になるのは当時すごく難しかった。なかなか試験に受からないわけです。そういうわけで、社会で行くか理科で行くか、だいぶ違うのですが、理科のほうがまだ選択の幅が広がるかな、というくらいの簡単な気持ちで、理学部に行くことにしました。

理学部では四年生くらいになると実験室に籠るのですけれども、やはり私は理学部がそれほど向いていないというのを、つくづく感じさせられたんです。私は有機化学をやっていて、仲間といいますか同級生や院生と、色々な有機化合物を作っていたのです。99.何パーセントというくらいの純度のものを作っていかなければならないのですけれども、私がやるとそれが98.何パーセントくらいにしかならないのです(笑)。で、他の人がやると99.何パーセントくらいになる。それは情熱の違いで、私の場合は「もうこれくらいでいいや」という気持ちのところを、他の人は一生懸命やるわけで、それが違いに出てきたんでしょね。

クリオ： 理学部を卒業された後は、教職や企業への就職を当初は考えていらっしやったのですか？

姫岡： 就職するとなると、そのとき考えられたのが私の場合、やはり公務員か教師の二つだったのですけれども、どちらにしろ、一生理科、化学から離れられないわけですね。一生、化学をやるのかと思うと、いやこれは違うなというふうに思って、卒業の年は全く就職試験も何も受けずにぼんやりしていました。それでも高校の非常勤の口があったので、それをしながら色々考えていましたところ、たまたまドイツに来ないかというお誘いを受けたのです。ですので、これはいいな、勉強しなごそう、やりなごそうと思ったわけです。まあ若かったのですね、22、3歳くらいだったので、あまり悲観的ではなく、新しいことをやりたかったわけです。そして今度は、ドイツに行ったら、社会科学をやろうと思っていました。ただ私は、ドイツ語は全くできませんでした。一応、理学部で読解一単位に文法一単位で合計二単位は取っていたのですけれども、ほとんど勉強もしませんでした。それでもドイツに行ったわけです。

その後、一からドイツ語を勉強して歴史学を始め、結構気に入って、わりとすんなりと修士まで、外国人だったのですけれどもドイツ人と全く同じペースで進むことができました、修士を修了しました。そしてそれからまた、どうしようかと考えたわけです。そこでもまだ研究者になるとか、そういうことはあまり考えていませんでしたが、とにかくもう少し勉強したいと思いついて、一度日本に帰って、日本で大学院に籍を置いて、また奨学金を取って戻ってきてもよいのではないかと、そういう考えで日本の博士課程に進みました。

クリオ： ご経歴ではフランクフルト大学の修士課程終了とありますが、そこには学部から留学されたのですか？

姫岡：　そうですね、学部の、本当に一からの留学ですね。ドイツの大学は、日本で大学を卒業していれば、あとはドイツ語力の審査だけで受け入れてくれました。だから、まずドイツ語を半年勉強して、ドイツ語の入学試験を受けて入学しました。入るのは簡単ですが、そこから絞られていくので、出るのはそんなに簡単ではない、というのがドイツのシステムですね。

クリオ：　学部の頃はどのような勉強をされておりましたか？特に印象に残っているゼミや学習の経験などお聞かせください。

姫岡：　学部のはじめには入門コースや入門ゼミがあります。授業は講義とゼミナール形式がセットになっているものが多かったです。入門コースでは一つが歴史の方法論を学ぶゼミで、あとは、1848年革命や中世など、テーマに沿った特殊ゼミがありました。単位のためにゼミ論文を書くのが結構大変でした。最初の入門ゼミで48年革命の論文、といいますかゼミレポートを書いたときは、10行くらいの史料の解釈を求められて、それをベースにA4で10枚くらい、びっしりドイツ語を書きました。日本語にしたら30枚くらいは書いたと思います。入門ゼミでそれくらい書くので、結構大変で、夏休みに一か月くらいはかけて書いていましたね。

私はフランクフルト大学で学んだのですが、その歴史学部は、歴史学における史料の大事さという点には非常に重きを置く一方で、女性史は全く扱わず、社会史も稀で、歴史主義的な、いわゆる政治史中心主義の伝統史学の傾向が強いところでした。しかし、その頃はちょうど1970年代半ばで、フェミニズム運動がすごく盛んな時期だったこともあって、私が主専攻の歴史学と並んで選択していた副専攻の社会学の中に、女性学という分野が登場していました。女性学ゼミ自体が当然ドイツで初登場という時でしたので<sup>3</sup>、そのニーズも大変に大きく、ひとつのゼミに300人くらい集まった上、みなさん本当にものすごい勢いで、非常にやる気のある人たちがばかりでした。ただ300人と言っても、先生は一人なのでサブゼミを作るわけで、だいたい5人から10人くらいでグループを作って議論をしていました。ともかく、女性運動や女性学の最初の熱気を体験できたのは非常に貴重でしたね。

クリオ：　そうすると、姫岡先生の場合、女性史研究に至るまでには、この女性学ゼミが非常に重要なきっかけになっていたのですね。

姫岡：　それともうひとつ、アウグスト・ベーベルの『女性と社会主義』の影響があります<sup>4</sup>。大学の前の古本屋で色々な本が安売りされていて、その中でこれを見つけ、買ってドイツ語の勉強を兼ねて読み始めたのです。専門家ではなく労働者向けに書かれているから、ドイツ語が易しかったのです。私はその頃ドイツ語があまりできなかったから、辞書はすごく引かなければならなかったのですが、一か月くらいで、最初から最後までを読み上げることができました。最初の方はすごく辞書を引いていたのが、最後の方にはほとんど引かなくてもよくなって。そして一冊読み上げた

<sup>3</sup> 例えば、1990年代に日本でも翻訳が出版されているM.Mies講師による、「世界システムと第三世界の女性」たちに関するゼミや、やはり当時講師だったU.Prokopの「ドイツの社会的女性」に関するゼミなどが存在した。

<sup>4</sup> A.Bebel, Die Frau und der Sozialismus, Stuttgart, 1910.アウグスト・ベーベル(1840-1913年)はドイツの社会主義者で、ドイツ社会民主党(SPD)の創設者の一人。

時に、ああ女性史いいな、女性史をやろう、というように…。だから、その本がすごく大きな契機となりました。

その一方で、もともと女性問題、女性運動、フェミニズムといったものには興味を持っていたのも確かです。日本でも、私が大学生の後半くらいの時にウーマンリブが興りまして、直接関わってはいなかったのですが、噂は聞いて関心は持っていました。本格的に触れたのはドイツにおいてでしたが、ドイツでは、運動をやること、つまり自分の生活を変えようとするのと、そのために学問をやることが一体になっていました。サブゼミも、みんな、すごく一生懸命に、自分の生き方を考えつつ、学問的な理論がどういうふうなところに役立っていくのかということを中心に問いながらやっていたので、やる気が非常に強まりました。

『女性と社会主義』を読んだことと、女性学のゼミと、女性運動への関心とが合わさって、女性のことをやるんだったら自分の生き方、自分の問題に関わってくるから、これだったら本当に一生懸命やれるな、という気持ちになりました。そんな理由で、ドイツでの大学の二年生のはじめくらいの頃には、女性をテーマにしようというのは決めていました。

ドイツで勉強したことが私にとって非常に幸運だったと思うのは、日本にいたらドイツ女性史なんて絶対にやっていなかった、と思うからです。当時の日本の女性史、ジェンダー史研究は、男性の研究者が本当にもものすごく一般的に書いた概説書の類があるくらいで、全く先行研究がなかったから、日本だったらなかなか始められなかった、と。ドイツにいたおかげでドイツ語に対する抵抗もなくなっていたし、はじめから史料を読んで同時代文献などにあたっていけるという幸運があったから、できたんだと思いますね。私の勉強した大学の歴史学部はわりとオーソドックスな歴史学が強い大学で、社会史などは当時すでに勃興していましたが、女性史はおろか、社会史とも縁の薄い大学でした。でも先生は、自分はおなたに助言はできないけれども、このテーマをやるのは意義があるからやりなさい、というふうに女性史に関して受け入れてくださった<sup>5</sup>。それも幸運でしたね。

ドイツでの修論は、「ドイツ革命と女性」について書きました。ゼミでテーマの一つとして、ドイツのブルジョワ女性運動というか市民的女性運動が取り上げられていて、その時に、私が後に研究することになるゲルトルーデ・ボイマーという女性について知りました。当時の女性学ゼミでは彼女を軸にしてドイツの市民的女性運動を研究しました<sup>6</sup>。ゲルトルーデ・ボイマーは非常に出世した女性で、70冊くらいのものすごい量の本を書いている。ちょうどドイツで女性が博士号を取れるようになった一番初期の頃に博士号を取っているし、選挙権が与えられてからは民主党の国会議員になって、内務省の参事にもなっているぐらいの人物です。ドイツの女性の中では最もエリートというか、高い社会的地位を獲得した女性だったにもかかわらず、彼女は「女性には女性の特性がある」とか、「女性は母性だ」とか言う

<sup>5</sup> マギスター（修士）論文の指導教官は著名な歴史研究者であるL.Gall。邦訳に『ビスマルク：白色革命家』（大内宏一訳、創文社、1988年）がある。

<sup>6</sup> Gertrud Bäumer（1873-1954）。

んです。1970年代は、男女平等と言ったら、まだまだ女性が男性と対等になることだとか、平等に評価されることだという見解が一般的だったので、彼女の主張は私にはすごくギャップがありました。そこまで登り詰めたエリート女性だったら男女平等と言ってもよいはずなのに、母性の重要性を主張するのはなぜだろう、というのが研究の出発点になりました。彼女の思想をもう少し詳しく見てみたいと思って、それを研究テーマにして博士論文を書きました。

クリオ： ありがとうございます。先生が女性史研究を志すまでの歩みには、1970年代のドイツで女性運動と学問の連携を肌で感じていた点が大きく影響していた、ということが伝わって参りました。続いて、この時代に関して桜井先生にも伺いたいと思います。

桜井先生は、『クリオ』17号のインタビューで、1975年の国連の国際婦人年や、76年から85年にかけての「国際婦人の10年」など国連関係の世界的な動きが、ご自身の女性や家族研究の一つの契機になったとおっしゃっています。桜井先生は1970年代の女性運動をどのように経験されたのでしょうか？

桜井： 姫岡先生より私のほうがだいぶ年長ですけども、榎美沙子さんを中心にしたウーマンリブ運動が起こったころ、私は反発も共感もしなかったんです<sup>7</sup>。そういう点では、ちょっと姫岡先生と違って私の方が、意識が遅れていたのだと思うんですけども（笑）。ああ、面白いことをしている人がいるなどは思っていたんですが、自分とは関係ないことだと思っていたんですね。ウーマンリブに対してかなり否定的、批判的といいますか、好意的でなかったメディアも、運動からほとんど相前後し国連の国際婦人年を契機にして、女性の問題をずいぶん取り上げるようになったのですよね。当時はまだ女は家庭にいるべきだとかね、子供がいるのに外で働くべきじゃないとかそんな議論があった時代ですが、とにかく女性の権利の問題などがしばしば新聞で取り上げられるようになりました。そのころ私は修論を書いて『史学雑誌』に発表しましたが<sup>8</sup>、その後どういうテーマでやっていこうかということ悩んでいたのも、女性はテーマとして面白いという、そこから始めたんです。自分の意識とか、それから自分の人生と研究テーマとが繋がっていくというのは、もうちょっと研究を進めた後でしたから、この点でも姫岡先生に比べると遅いんですね、自覚が。

クリオ： 桜井先生のインタビューの際にはもう一つ、1981年の9月からスタンフォード大学の古典学科に留学されたときに、留学先の近くで起こったレイプ事件を通じて、黒人犯罪や人権問題、ゲイやレズビアンなどの問題に、実際に身近に触れたことが二つ目の契機として語られています。その中で、先生は当初から「他者としての女性」という括りで捉えられていますが、これに関してもう少し詳しく伺えますか？

桜井： ウーマンリブもそうでしたけども、その後のフェミニズムの運動についても私はちょっと距離を置いていました。その後、スタンフォードに行って、前に申し上げ

<sup>7</sup> 1967～77年にウーマンリブ団体「ウルフの会」、中絶禁止法に反対しピル解禁を要求する女性解放連合(中ピ連)、中ピ連を母体とした日本女性党で奇抜なウーマンリブ運動を繰り広げたことで知られる。

<sup>8</sup> 桜井万里子「エレウシスの秘儀とアテナイ民主政の進展」『史学雑誌』82編10号(1973年)。

たように、社会におけるマージナルな存在というものを意識して、やっぱりこれは自分自身にも関係があると思ったんです。ジェンダー史でテーマとしている男女の関係だけではなくて、性の関係によっても社会構造というのが規定されているということに、自覚的にかどうか、無意識的にかもしれないですが、気づいたんでしょうね。黒人とかゲイとか女性は社会全体の構造の中に置くと大変似ているということを感じて、これはやっぱりもっと突き詰めて考えていきたいと思いました。今考えると、女性史よりもジェンダー史に共感を覚えるようになったというのは、自分の問題意識としてそれがぴったり行くと思ったからだと思います。

クリオ： ありがとうございます。ジェンダー史という同じ問題関心を共有されるに至る先生方ですが、1970年代の女性運動の受け止め方など、その過程が大きく異なる点がとても興味深いですね。

桜井： そうですね。まあちょっと世代もね、違うっていうのもありますし。

クリオ： 女性史を研究テーマとして日本で博士課程に進学なさった後は、姫岡先生はどのように過ごされていましたか？研究者を進路として意識なさったのは、どのような理由からでしょうか？

姫岡： 私が博士課程に進学したころ、女性は全般的に研究者、特に定職に就くのはまだ難しかったです。非常勤のかたちで続けている人は結構いましたが、定職に就いている人は男性に比べれば圧倒的に少ない状況でした。ですから、先のことはまだわからないけれども、とにかく博士課程に入ってから考えよう、みたいな気持ちでした。私はドイツに長い間居たので、その間にドイツ語の通訳や翻訳でもお金は稼げるようになっていましたし。ただ、私自身博士課程で一年生、二年生とやっついていくうちにずっと研究を続けていきたいという気持ちになりました。指導して下さった先生も、私が一年生のときは、博士課程には受け入れるけれどもまだどうなるかはわからない、というお考えだったのが、次第に研究者になる人として見てくれるようになりました。

研究者を目指した博士課程の二年の頃、日本でも女性学が興ってきて、私と同年代の仲間がたくさんいたんですね。今ここの社会学におられる上野千鶴子さんがその頃<sup>9</sup>、京都の平安女学院短期大学におられたので、彼女が研究会を組織して、二週間に一回ずつのペースで研究会を行い、すごく勉強になりました。歴史の人はそんなにいなかったのですが、文学、社会学とか、農学とか法学とかいろんな人が集まっていて、そこで受けた刺激はすごく大きかったですね。上野さんやほかにも就職していた人はいましたけれども、大学院生が多くて、その頃はちょうど女性が大学に就職できるようになる転換期でした。その前だったら、女性の就職はすごく難しく、結婚していたら「旦那さんが職を持っているのだから、あなたは研究を続けるんだったら非常勤でやっていきなさいよ」みたいな雰囲気があったのです。だからみんなで、就職できるんだろうとか、そういう話をよくしましたけれども、結局そういうことを話していた人はみんな就職したのです。私の就職の時期頃から少しずつ女性が採用されるようになり、そういう意味でも幸せな、幸運な時期にめぐ

<sup>9</sup> 東京大学大学人文社会系研究科（本郷）。

り合いました。

クリオ： ありがとうございます。姫岡先生の場合は、留学や日本の博士課程を通じて、次第に研究者としての意識に目覚めていかれて、就職も、時代が女性の社会進出を受け入れていった時期と重なるということですね。

## 2. 研究者として

### ①女性史研究

クリオ： 次に、お二人の女性史研究者、ジェンダー史研究者としての歩みについて伺いたいと思います。桜井先生は1992年に『古代ギリシアの女たち』（中公新書）を、姫岡先生は1993年に『近代ドイツの母性主義フェミニズム運動』（勁草書房）を、というように、お二方とも1990年代のはじめに女性史についての単著を出版されています。この時期の研究テーマやその設定の理由、研究手法や内容、その時点での課題などについて語って頂きたいと思います。では桜井先生からお願い致します。

桜井： 私は80年代に、先ほど申しましたとおり、女性の権利など古代ギリシアにおける女性の問題について研究を進めて、論文をいくつか出しましたが、そのときには女性史を研究しているという自覚はなかったわけです。でも、次第にアメリカを中心に女性史の論文が沢山出てきました。それで、やはりこれは大きな動きだし、大事だと思って発表したのが、1986年に『歴史学研究』に出した「古代ギリシア女性史研究—欧米における最近の動向—」<sup>10</sup>です。ここで、自分が自分なりに読んだものをまとめて、どういう動きが今あるかを紹介したいと思ったので。まだ日本ではそういう動きはなかったのですが、大事な動きだと思って紹介したわけです。今読み返すと、若いときでなければ出来ないなって思うくらいに、よく読んでまとめているんですけども、ちょっと見たら上野千鶴子さんも引いていますね。やはり、彼女の書いたものにも影響されていると思います。ただやはり、姫岡さんもおっしゃっていたように、関西の方が女性史や女性研究は盛んだったように感じます。上野さんや姫岡さんなんかのグループが勉強していらして、それがだんだん関東にも伝わってきて自分も刺激を受けたのだらうと思います。これをまとめたのが86年ですが、これでほとんど私としては自分なりにすべきことはやったという感じでした。その後は、スタンフォード大で経験したようなマイナーな存在、いわゆるギリシアだったら非市民、つまり市民でない人たち、外人とか女性とか奴隷とかの問題、あるいはそういう人たちのポリスにおける位置というものを考えていくという方に関心が移ってきました。

『古代ギリシアの女たち』は80年代の終りくらいに出版の話があったのですが、自分がこの『歴史学研究』でまとめた時に考えていたようなことを、新書ですから、かなり一般的に書こうと思いました。女性について書きたいと編集者の方に伝えたら、神話は困るって言われたんですよ。自分では神話を書くつもりはなかったけれど、おそらくギリシアっていうと神話、女性といえば女神というような発想が向こうにはあったと思うんです。でも、概略を書いて渡したときに、これならいけると

<sup>10</sup> 桜井万里子「古代ギリシア女性史研究—欧米における最近の動向」『歴史学研究』552（1986年）。

いう風に、その編集者の側も思ったようです。

ただ、書き始めてから完成までにはすごく時間がかかりました、最初はいあまり熱心じゃなかったもので。これを書いている間は、同時並行して関心はむしろマイナーな存在のポリスにおける位置ということにあって、そちらの研究をしていたんです。それが数年後に発表した本にもつながっていくのですけれども<sup>11</sup>。ですから『古代ギリシアの女たち』を書いた時には、これが自分の最大の関心事ではなかったってことですね。それは、姫岡先生のご本がご自分の研究書であるのに対して、私の本は中公新書ですから、註もないですし、そういう違いというの現れていると思いますけれど。

クリオ： 先生の1992年のご本は、1986年の研究動向の整理をふまえて、一般への教養書という性格が強かったわけですね。ありがとうございます。

では、次に姫岡先生に伺います。先ほど博士課程での研究テーマについて伺いましたが、この1993年の『近代ドイツの母性主義フェミニズム運動』というのは、博士論文を本にされたものなのでしょうか？

姫岡： そうですね。この本で博士号をとりました。

クリオ： 先生はこの本のあとがきで、男女平等の追求ではなくて、母性や女性らしさを主張した母性主義フェミニストには違和感をもったまま研究をしていた、とおっしゃっています。また、彼女たちが全体への自己犠牲を強調した点も、ナチズムの肯定につながったとして批判なさっています。ここを拝読した際に、先生ご自身の心情の吐露が多いなど感じたのですが、この本を書かれたことで、ドイツの母性主義やそれにもとづくフェミニズムというものに対するお考えに変化がありましたか？

姫岡： 母性主義自体に対しては、変化はありません。違和感を持っているのですが、ただ、そういう形のフェミニズムというものがあろうんだということ、この研究を通じて学びました。それまで私の頭の中には、フェミニズムといえば男女平等だという意識があったし、それがフェミニズムに対する一般的な理解でもあったのですが、女性の特性を主張しながら女性の地位を向上させていくやり方もあったのです。この傾向はドイツだけではなくて、フランスやアメリカなんかでも結構強い。イギリスはサフラジェット<sup>12</sup>のイメージから、ミリタントな参政権運動こそフェミニズムだというイメージがすごく強くて、私自身もそういうイメージを持っていました。しかしイギリスでも、男女平等よりも母性とか女性の特性を主張しながら女性の地位を向上させる運動が結構強かったんだな、と自分の研究を通じて分かりました。

あとは、ナチってというのは必ず頭にありますね。だからナチズムに対してどういう対応をするのだろうか、ということも一つの出発点になりますね。

クリオ： ありがとうございます。フェミニズム運動には歴史的に、男女平等の追及と女性らしさの追求という二つの潮流があった点を忘れてはいけないということですね。

<sup>11</sup> 桜井万里子『古代ギリシア社会史研究：宗教・女性・他者』（岩波書店、1996年）。

<sup>12</sup> 20世紀初頭のイギリスの婦人参政権運動活動家（サフラジスト）のうち、戦闘的な運動を繰り広げたグループをさす。1903年にマンチェスターで結成された「女性社会政治同盟」のパンクファースト母娘が代表的人物である。



## ②女性史からジェンダー史へ

クリオ： では次に、90年代後半に先生方が問題関心を女性史からジェンダー史へ移行された点について伺いたいと思います。1970年代頃におこった新しい女性史は、それまで女性を排除してきた歴史記述に異を唱え、歴史を動かす集団的、能動的、統一的主体としての女性を設定して、その活動を明らかにしようと試みてきました。しかし次第に地域的、階層的な女性内部の差異や多様性が指摘されるようになると、その後のジェンダー史では、歴史的に構築される女性・男性という存在、それぞれの間の権力関係のあり方がどのように社会で構築され再生産されていくかに着目するようになり、研究対象や研究手法が大きく変わりました<sup>13</sup>。この変化について、先生方がどのように受け止められたかを伺いたいと思います。

では、まず姫岡先生から、その2004年の『ジェンダー化する社会』（岩波書店）に至るまでどのような葛藤や変化があったか、お聞かせ願えますか。

姫岡： 先ほどまでの続きになるのですが、80年代に私が母性主義について研究している間に、ドイツでは非常にたくさん母性主義に関する書物が出てきたのです。私はその母性主義に自分自身が同一化することなく、研究対象として扱っていただけでしたが、母性主義とは必ずしもいえないけれども、女性の可能性とか、女性の秘めているパワーをすごく強調するとか、男にはない女の持つ力を本質的なものとして捉えるという傾向が、女性史研究者、あるいは女性学研究者の中にあっただけです。今までそういう女性のパワーは全く評価されなかったので、女性の地位向上という、男性並みになりたいという傾向が強かったのですが、そういう男女平等に対して、価値尺度を変えていくというか、男の価値尺度に女が合わせるのではなくて、もっと女の価値尺度を強く出していくべきではないか、という傾向が出てきました。男性の価値尺度に合わせる必要はない、という点に私は賛成だったのですが、ただそれが本質的なものだとはまでは言えないと思っていました。女性と男性とが違った道、違った歴史を歩んできたのは、本質的に男女が違うからではなくて、女性であること、あるいは男性であることに規定されてこういう結果になったのだ、という人為性の方から考えたいと、ずっと思っていました。

『近代ドイツの母性主義フェミニズム運動』を書き上げたのが93年で、新しい研究をはじめたのが92年なのですけれども、ちょうどその頃から、言語論的転回とか、ポスト構造主義の構築主義とかが出てきはじめました。J.W.スコットの日本語での翻訳もちょうどその頃でしたよね<sup>14</sup>。その後、93年にドイツに一年間留学しましたが、その時ドイツでは構築主義が非常に大きなテーマになっていました。日本で私が『近代ドイツの母性主義フェミニズム運動』を書いたときには、構築主義を知らず、そういう発想も全くなかったのですが、ドイツに行って、言語が現実を構築するとか、その類の話を聞いたのです。きちんと説明してくれるわけじゃなく、パッと結論だけを言われるわけです。現実には言語によって構築されるのだ、とか言

<sup>13</sup> 「女性史からジェンダー史へ—方法論と史料の多様化—」『イギリス近現代女性史研究入門』（青木書店、2006年）など。

<sup>14</sup> ジョーン・W・スコット（荻野美穂訳）『ジェンダーと歴史学』（第一版、平凡社、1992年）。

われても、一番初めに聞いたときは何のことやら。「歴史は事実・実態を書くのだ」という思いが私にはあったので、「どういうふうにしたのかということを書くのが歴史なのだ」と思っていました。だから『近代ドイツの母性主義フェミニズム運動』もその方法論に基づいて書いたのですが、その「どういう風に生きてきたのか」という現実がつくられたものなのだ、という話をボーンとされるわけですよ。それからすごく悩み始めて、ずーっとそのことが頭から離れなくて。その頃から、けっこう構築主義を説明した本も出はじめたので、そういう本を読みながら、それをどういう風に自分の歴史研究に活かしていけるんだろうか、ということを考えていました。でも、方法を転換させるには、随分と自分の中でも時間がかかりました。「こうあった」「こうある」ということが作られた結果としてあるから、作られていく過程というのを見ていこう、とか。あるいは人々の認識の仕方ですね。同じものでも、認識の仕方によって全然見え方が違う、とか。それから、あるものに対してどういう意味付けをするのか、とか。

そんなことが見え出した段階で、次にジェンダーについて考えました。次の研究は労働をテーマにすることと、日独比較についてやることも決まっていた。日独の労働を、最初は社会経済史的に、女性はどういう風に働いていたかとか、あるいは賃金の違いとか、男女の労働の違いとか、といった事柄でやろうとしていたんです。でも、織物工業を取り上げたときに、その労働の意味に対する認識の仕方がドイツと日本では全然違うと気付きました。その理由は何なのだろうとか考えたときに、ジェンダーの違いがすごく大きな影響を及ぼしているのではないかと思います。産業の担い手のジェンダーが違えば、その労働に与えられる意味合い、担い手自身が規定するものと、あるいは他者から規定されるものと、両方ともすごく違ってくるのではないかと。こういう意味付与が構築主義的なジェンダー史研究のひとつのベースになっていたので、そこを突破口にしてやってみようと考えたわけです。

それまでは、女性労働については、女性労働の実態という点から、同時代に書かれた数多くの本が出ていました。それで私も、やはりその実態に本当に現実が書かれているんだ、という風に受け止めて、現実を示す史料として用いていたのです。でも、まさに言語によって現実がつくられるというか、その実態報告の中にも、女性労働はこうあるべきだとか、女性というのはこうあるべきとかいうメッセージが潜んでいて、そういうことを免れて、ただ客観的な現実だけが映し出されているわけではない、そこには書き手の思いがすごく投影されていると気づいたのです。そこに加えて研究者の立場とか、研究者を取り巻く状況、文化、社会とかがあって、そういうところが実態研究にも出ている。それが言語化されることによって、あらためて現実となっていくのだ、ということに気付かされました。だから、「実態」というのも、そのまま実態として受け止めては駄目で、書かれているテキストをテキストとして分析していかなくてはならないんだ、という論点に気付いたというのが、この『ジェンダー化する社会』にとっては非常に大きかったことですね。

クリオ： ありがとうございます。姫岡先生が研究テーマを女性史からジェンダー史に変えられる際、構築主義や言語論的転回を、試行錯誤しながら真摯に受け止められた

ことが伝わって参りました。

桜井先生は当初から、ご自身の研究の関心が女性史というよりは、社会におけるジェンダー関係の構造といったように、ジェンダー史に近い点があったということでしたが、先生は、このジェンダー史への転換についてはどのように受け止めていらっしゃいましたか？

桜井： 一つには、姫岡先生もおっしゃいましたけれども、私が90年代に『古代ギリシアの女たち』を書いたときには、まだやっぱり女性についての歴史的な事実を書く、という意識がありました。そういう姿勢で本を書きましたが、気をつけたことがあります。その頃、東京学芸大学で教えていたのですが、講義でずっと女性の権利について、女性には市民権も、不動産所有権も、相続権もないとか、そういう話をしていました。そうしたら、試験のときの講義の感想で、男子学生が書いたと思うのですが、「もううんざりだ」って感想が出てきたんですよ。「女が不利だとか、女が抑圧されているって話ばかりでうんざりだ」っていう。それを読んで確かにその通りだとは思いました。この本は新書で一般的な本だから、うんざりだと思われると良くない。記述の方法といいますか、これを歴史学でより意義あるものにするにはどうしたら良いかと思って、やはり古代ギリシアという社会の構造の中で、女がどう位置づけられるか、そしてそういう女の位置は、どういう関係の中で説明できるかということには心がけました。けれども、事実を述べるということについては、ここでは疑いは持っていなかったんです。

ですが、この本が出たあと、言語論的転回の時代ですから、そういう立場からの批判がありました。それで、自分自身でも言語論的転回っていうのがどういうことなのか、っていうのは随分考えようと思いました。批判も受けたので、史料をどう読むかについても、読み方を考え直して、新たに考え始めました。でも、この本自体は結構いい本だと思うんですよ、今読んでも。ただ、やはりここには書き加えるべきものがある、補うべきものがあるっていうのは、今は感じています。事実をありのままっていう風に、と言っても、「ありのままの事実」ってどうして分かるの？ということが言語論的転回の問題提起ですが、それは正しい指摘だと思いました。そうすると、史料から「ありのままの事実」というのがどこまで言えるのだろうか、またその場合に、歴史叙述ということで古代ギリシアの女性について書くならどういう方法があるか、と、そういう考え方をもちながら、その後の女性に関する論文を書いていると思います。

クリオ： ありがとうございます。先ほどの男子学生のコメントは、女性史における「被害者史観」への感想として興味深いですね。先生方のお話から、言語論的転回からの史料批判が歴史学に与えた影響が実感として伝わってまいりました。

### ③ジェンダー史

クリオ： 続いて、先生方のジェンダー史研究の手法や問題関心、さらに学会に関する活動について伺いたいと思います。

まず、桜井先生とジェンダー史学会の関わりについてお尋ねします。ジェンダー史学会は、設立趣意書の中で、ジェンダー概念が「国際的には今や、学術研究の基

本概念として、21世紀の新たな知のパラダイム構築に関わるもの」と述べて、この概念が「学問的に認知されつつある状況での研究活性化」を目指しています<sup>15</sup>。桜井先生は発起人の一人として参与という役職に就任され、『ジェンダー史学』の2004年の創刊号で研究ノート「ジェンダー史の方法—古代ギリシアの場合—」を執筆していらっしゃいますが、どのような経緯で立ち上げに参加されたのでしょうか？

桜井： 姫岡さんもおっしゃっていたスコットの本は、日本語で出たから読んだけど、原書そのものでフォローはしてなかったんです。大体読むものは古代ギリシアのものでしたし、関心もほかについていましたから。でも日本語で出たので読んで、とても共感したのを覚えています。だから、このジェンダー史学会が誕生するときにも、それは意義がある、と思って参加しました。私は女性史の学会や研究会には入ってなかったんですよ。もちろん、そういう学会も意義はあると思うのだけれども、ジェンダー史というのは、女性にとどまらない、とても可能性のある考え方、視角だと思ったので、参加すべきだと考えました。だから、発足のときに京都の姫岡さんにお電話しているんですよ。

姫岡： そうそう、「何かして下さい」と言われました。そうでなかったら、私も参加しなかったかもしれない。私は発起人には入っていませんし、設立大会も別の用事があったので行かなかったです。

桜井： そうでしたね。快く引き受けてくださったので、よかったのですけれども。私は最初の発起人には名前がありますけれど、長野ひろ子さん<sup>16</sup>から頼まれて発起人になったので、自分からジェンダー史学会をつくりましょうって声上げたわけじゃないんです。長野さんとか、義江明子さんとかね<sup>17</sup>、そういう方々が中心で実際の立ち上げの作業なんかをなさったので、私は何もしていません。

クリオ： ありがとうございます。ジェンダー史研究を志す人間として、学際的な学会の発足をととても喜ばしく思います。

では、次に姫岡先生に、ジェンダー史の研究テーマについて伺いたいと思います。これまで発表された御著書を拝見しますと、先生のテーマは大きく二つあるような気がいたします。まず一つは、今挙げられた労働のジェンダー化と近代家族の形成の問題です。このような問題関心に至られた経緯をお聞かせ頂ければと思います。

姫岡： それは80年代に、アナル派の著作が数多く翻訳されて出てきたからです。「母性はつくられる」とか、「主婦の誕生」とかですね。それまでは「女は昔から主婦だった」みたいな考え方が非常に強かったし、私もそういう考えから自由ではありませんでした。母性は本能だという考えに対する疑問だけは強まっていました。そういうところに、アリエスの『子供の誕生』が評判になり<sup>18</sup>、「母性の誕生」につい

<sup>15</sup> 「ジェンダー史学会設立趣意書」『ジェンダー史学』創刊号（2004年）、159頁。

<sup>16</sup> ジェンダー史学会、現代表理事。中央大学教授。専門は日本近世史。単著として、『ジェンダー史を学ぶ』（吉川弘文館、2006年）など。

<sup>17</sup> ジェンダー史学会、現理事。帝京大学教授。専門は日本古代史、女性史。単著として、『つくられた卑弥呼—“女”の創出と国家』（筑摩書房、2005年）など。

<sup>18</sup> フィリップ・アリエス（杉山光信・杉山恵美子訳）『子供の誕生』（みすず書房、1981年）。

でも色々な著作が出てきました。心性、マンタリテの研究によって、愛情とか、人々の接し方とか、そういうものが歴史的に変化していくということが言われて、それにすごく大きなインパクトを受けました。特に女性にとっては、母性は本能だと言われて、それは本能じゃないんだと反論するときには、アナル派の研究がものすごく支えになりました。私にとっても、女性は昔から主婦だったわけではなくて、主婦も歴史的な産物だから、また変えていくことだって出来る、と納得した意味で、アナル派の翻訳の影響力はすごく大きかったですね。それがずっと研究のベースになって、そのあたりの著作を読んでいました。

それと、男性研究者が労働を研究するときには、家庭や家族から労働だけを切り離して、公と私を分離させてしまう傾向があります。男性の労働、特に就業労働を公の部分とみなして、そこだけを見ていくという観点だったのだけれども、それでは女性の労働は見えにくいし、そういう風な見方をされているから女性の労働が不可視になっていました。だから、女性の労働研究をする場合には、家族と労働をセットにして見ていかない限り解明できない、ということは80年代からずっと思っていて、その関連で家族についても本を読み続けていたのです。自分の研究で母性主義フェミニズムをやったときも、家族の状況と関連させながらやっている。だからずっと家族をみてきて、その流れですね。

クリオ： ありがとうございます。労働の概念を家族の観点から見直すことは、近代的な公私の二項対立的な領域分離を再考することにつながりますね。

それでは、二点目に、ジェンダー史の方法論というテーマについて伺います。これについては2009年2月に出版された『ドイツ近現代ジェンダー史入門』が、一つの大きな成果としてあると思うのですが、どのような経緯で出版に至ったのか、また学際的な執筆陣の人選や、扱ったテーマなどについてお聞かせ願いたいと思います。

姫岡： ドイツの全体的な女性史、ジェンダー史の入門書としては1990年に、私も翻訳者の一人として関わったウーテ・フレーフェルトの『ドイツ女性の社会史』があります<sup>19</sup>。これは非常にいい本だけれど、それからもう14、5年たって方法論も変わってきていますし、何か別のジェンダー史の観点から、ドイツの近現代のジェンダー（女性、男性も含めて）を見たらどういふ本が書けるのかな、というのはずっと考えていました。桜井先生の『古代ギリシアの女たち』のように、私自身が簡単なドイツ近代ジェンダー史について一般的なものを書こうかな、という気持ちもあったのですが、今の非常に幅広い研究状況を考えると、ちょっと手には負えないな、と躊躇していました。そしたら、2006年に『イギリス近現代女性史研究入門』<sup>20</sup>が出て、その後で、私のところにそのドイツ版をつくってくれないかという話がきました。ちょうど近現代のジェンダー史を俯瞰できるような本が必要だなと思っていたところにその話がきたので、すごく嬉しかったです。

1990年からの間に日本では若い人、三十代後半から四十代はじめの人とか、それ

<sup>19</sup> ウーテ・フレーフェルト（若尾祐司他訳）『ドイツ女性の社会史：200年の歩み』（晃洋書房、1990年）。

<sup>20</sup> 河村貞枝、今井けい編『イギリス近現代女性史研究入門』（青木書店、2006年）。

以前はジェンダー史とかやってなかったけれども、ジェンダー史に興味を持ち始めたという五十代の研究者とか、女性史やジェンダー史をやる研究者が非常に増えていましたので、これは非常にいいものが出来そうだと感じました。また、私はドイツ学会で文化とか、音楽とか、文学とか、違う分野の研究者とも知り合っていたので、単に歴史学の視点だけじゃなくて、学際的に書いたら非常に面白いものが出来るんじゃないかと思いました。

それから、イギリスは女性史だったのですけれども、私はぜひジェンダー史で本をつくりたいと考えていました。女性史だったらどうしても女性というくくりになって、一般史とは別個に対置されてしまう。そして、一般史の方の人たちがなかなか女性に着目してくれないという現実がある。そのことに対してすごく苛立ちを感じていたので、何とかして全体史の流れの中にジェンダーがどう入り込んでいるのかを示したい、というのが本を書いた時の一番強い思いでした。実際、多くの人がやはり同じような見解を持っていました。文化のところを書いた香川檀さんとかもそうですけれど<sup>21</sup>、ジェンダーの差異、ジェンダーの基本ですけれども、「男や女はつくられるんだ」という、本質じゃない男女の作られ方、差異化をベースにして書いてくださる人が非常に多かったので、そういう意味ですごくまとまりのある本になったなと思います。もちろん、違う手法のものも入っているので全部が全部そういうものではないけれど、差異を機軸にして歴史を見ていく、そういう風な差異をつくっていくことがどう歴史全体につながっていくのか、という観点が多い。だからこそ、ナショナリズムとか軍隊とか、今までだったら女性史ではあまり問題にされなかったような論点にも触れられたし、非常によかったです。

クリオ： ありがとうございます。『ドイツ近現代ジェンダー史入門』の内容が非常に学際的である理由や、本書にドイツ・ジェンダー史から一般史・全体史へのつながりを探る戦略が含まれていることなどが、よくわかりました。

### 3. 教育者として

クリオ： 今までは研究者としての立場から、先生方の女性史からジェンダー史への歩みを伺ってまいりましたが、最後に教育者としての抱負や実践について伺いたいと思います。

それではまず姫岡先生から、これまでのご教育について、特にゼミや講義、学生の指導などに際し、どのようなことに気を配ってこられたのか、お聞かせ願えますか。

姫岡： 私は東大に来る前に筑波大学にいて、その前に立命館大学にいました。立命館のときは国際関係学部だったので、歴史プロパーじゃなくて、例えば現代ドイツの二重国籍の問題のように、地域研究としてドイツへの関心がすごく強い人たちを相手にしていたんです。そこでも、ルーゼ・オットー＝ペーターズ<sup>22</sup>とか、ドイツの初

<sup>21</sup> 武蔵大学人文学部教授。『ドイツ近現代ジェンダー史入門』において第二章「文化」で「言説が作り出す創造性の性差—ドイツ表現主義と女性芸術論—」を担当。

<sup>22</sup> Louise Otto-Peters (1819-1895)。文筆家。ドイツの組織的な女性運動の創設者として知られる。

期の女性活動家について博士論文を書いた人もいたので面白かったです。気を付けた点は、そうですね、学生にはその人自身のやりたいことがあったので、その関心を伸ばすということですかね。だから、あまりこちらから問題関心の強制はしたくはない、という思いがすごく大きかったです。

講義は、最初の立命館ではドイツ語と、比較社会史というのをやっていました。比較社会史は、ドイツと日本の社会の歴史的比較を扱っていて、『ジェンダー化する社会』を書く際に比較史を扱おうと思った契機にもなりました。それが大学改革でなくなって、私は国際関係学とジェンダーの講義の担当になったので、歴史も絡めてやりながら、社会学の理論とか国際関係学とジェンダーとか、いろいろ勉強しました。ただ、勉強はしていたのだけれども、中途半端だったんですね、すごく。自分の専門じゃないことを、学生に教えるためにやっていたので。それで学んだことも沢山あったのだけれども、やはり筑波大学にいて西洋史で講義やゼミをするようになって、西洋史で教育も研究も出来る喜びをすごく感じました。筑波では、ヨーロッパ史の概説と、特殊講義と史学概論などを担当しました。

クリオ： では、今後の東京大学での教育の抱負などがございましたら、お願いいたします。

姫岡： やはり西洋史で教えられるというのが嬉しいです。それから、筑波時代も感じたことですが、教えるためには自分自身が勉強しなくちゃ駄目なんですね。それはもちろん立命館時代もそうだったけれども、立命館の時は、講義やゼミのために勉強したことが自分の研究に直結しなかったのです。確かに国際関係論に関する論文とかは書いていたのですが、やはり自分が本当にやりたいことを勉強していくのと、同時にそれを伝えていく楽しさが、歴史学を教える時にはあると思います。もちろん、自分のやっている研究がベースにはなるけれども、それだけで押し切ることは出来ないで、いかにそれに関連した一般知識を織り交ぜつつやっていくか、ということなんです。それから、そういう自分が教えていることが、今の歴史学の流れの中でどこに棹差して、どういうところから来ているのか、ということをお忘れずにやっていきたいとも思います。立命館時代だったら同じ歴史学の授業をやるにしても、相手が歴史学のプロパーの学生ではないから、そこまではなかなか出来ないのだけれども、東大の場合だったら歴史の人たちを相手にするので、そういうことを含めながら、講義していきたいです。

クリオ： ありがとうございます。姫岡先生の今後のご指導がとても楽しみです。

つづいて桜井先生、大学を退職された後の教育活動についてお聞かせ願えますか。

桜井： 退職してからは、非常勤として私立大学の大学院で教えています。それから朝日カルチャー・センターで、二週間に一回の講座も担当しています。この二つは全く受講生の層が違うんですね。朝日カルチャーでは定年退職した方とか、四十代、五十代の方が多くて、他方では私立の大学院の学生がいて、それぞれから刺激を受けています。姫岡さんが今おっしゃったように、やはり教えるということは、自分も学ばなくちゃならない。今でも、教える準備のために勉強することが、自分にとっても良い勉強になります。そして、質問の質も、この私立の大学院の学生と朝日カルチャーの受講生とでは全く違います。長い間社会で経験を積んできた人たちからの質問を受けるのも刺激になりますし、私としましては、ある意味では、自分がこ

れまで研究してきたこと、教育してきたことの成果というものを、今度は社会に対して発信して、それで古代ギリシア史を少しでも広めたい、その認知度を高めたいという風に思っています。そこで、思いがけずというか、こちらから発信するだけじゃなくて、自分自身が吸収して変化することもあります。ですから、いくつになっても完成はしないんだな、と思います。

姫岡： 教えるというのも、一方的に与えるというのではなくて、受け取るというキャッチボールがあります。黙っていても表情とかで学生が面白がっているかどうか分かるし、意外な質問が来て答えられないときもあるし。でもそれが自分にとっての考える契機にもなるから、私も自分が教えている人たちからすごくパワーを貰っています。自分の活力の源になっているな、というのはすごく感じますね。

クリオ： ありがとうございます。桜井先生が『クリオ』17号でおっしゃっていた、教師と学生がともに学ぶ「アカデミック・コミュニティ」は、すべての学問にあてはまることなのですね。そして姫岡先生もそれを共有されている、と。

では最後に、先生方から若手のジェンダー史研究者、もしくは女性研究者にメッセージをお願いしたいと思います。

桜井： ジェンダー史というのは、先ほども申しましたとおり、非常に可能性のある歴史学の方法だと思います。ですから、自信をもってやって頂きたいです。決して、歴史学においてマイナーな分野じゃないと思います。ジェンダーという言葉に対して、まだ日本社会ではなじみがないと思う人がいるようですけども、ジェンダーは20世紀の後半に生まれたとても大事な概念ですから、今後継承してさらに発展させていくべきだと思います。歴史学というのは、幸いに学問、あるいは人文科学として、科学的な研究方法が他の学問に比べて、あくまで比較的、ですけども、出来上がっている学問だと思います。だから、19世紀から少しずつ築かれてきたその方法をきちんと踏まえて、さらにジェンダー史という方法を開拓して頂きたいと思います。やはり根のあるところからきちんとやらないと。根無し草になっては弱いですよ、学問として。

若手の女性研究者は、今は昔に比べると随分と状況が恵まれてはいると思います。ただ、今は人文科学に対する社会や国の許容度や注目度が不当に低くなっていると思います。結果がすぐに出る、お金になる学問がもてはやされていて。だから、そういう点では歴史学をやる人も大変だろうと思いますけれども、自信を持っていたきたいです。何とか、私なんか微力ですけども、もう少し人文科学の、歴史学の評価がまた高まるように努力したいと思いますし、それは若い男性の研究者にも言いたいことです。今は男も女も就職が大変だし、本当にそういう点ではお気の毒だと思うのですが、歴史学の基本をちゃんと身につけて、自信を持って希望を失わずに、頑張っていたきたいと思います。

姫岡： 私もね、桜井さんが言われた史学史的な観点は、非常に重要だと思うのです。私は幸運なことに大学の指導教官だった先生が、研究分野はナチスだったのですが、史学史に関心のある方で、雑談でよくそういう話をしてらっしゃいました。その時代に関して素人であっても、その時代の歴史学を知らなくては駄目なんだ、というようなことをよく言っておられたのです。ジェンダー史も突然出てきたものではな



くて、過去からの歴史学の営為のひとつの帰結として出てきたものなので、ジェンダー史だけやったらいいというものではない。基礎、つまり史学史の流れの中でのジェンダー史を見ていくのは、非常に重要だと思うのです。ただ、ジェンダー史の人には一般史への理解も期待されて、ジェンダー史だけやっているのでは駄目だよ、と言われるんだけど、ジェンダー史以外の歴史をやっている人はジェンダー史は見なくてもよくて、「普通」の歴史さえ見とけばいいんだ、といった傾向がまだ非常に強いと思います。それだけ、まだまだジェンダー史はマイナーというか、特殊な領域だと見られています。ジェンダー史を見なければ歴史が分からない、ジェンダー史が歴史の流れにとって非常に重要なものなんだ、ということ認識してもらえれば非常に嬉しいと思うんですけど、これは学問的な関心だけの問題じゃなくて、色んな立場とか見解とかが交錯する中でそんなに簡単なことではないのです。でも、それだけジェンダー史の認知度が高くなってくれればいい。そのためには、やはりジェンダー史自身がそういうインパクトのあるものを書いていかないことには、駄目だと思うんですね。だから、若手の人たちには、一般史にもインパクトを与えられるようなジェンダー史研究、ジェンダー史研究の中に閉じこもるのではなくて、他分野に認知されるジェンダー史研究というものを書いてほしいと思います。

あと、私は若手の研究者の頃、ちょうど社会の転換点だったといいますが、自分は幸運な時代に生きてきたな、と思うのです。もうちょっと前の時代だったら就職ももっともっと難しかったでしょう。そんなに人がやっていない未踏の分野で開拓者としての道を歩めたという幸せもありましたけど。今は、女性研究者と男性研究者の差はあまり関係なくなっていて、女性だからといって特別扱いや差別もされない。だから、女性研究者自身が頑張っていけないと駄目だと思います。でも、道は開けていて、その道も、先人が開いてくれたという歴史があるので、今のすごく優秀な女性研究者も、全く自分だけの力で道を切り開いてきたという意識ではなくて、過去からの積み重ねがあってこそ開けていける道だと考えてほしいです。女性研究者も今はあまり男性と区別されないから、そういう点でやりがいもますます大きいし、頑張してほしいと思います。昔だったら結構、あきらめてしまう人も多かったんですよ。私も父から全く期待されていなかったように、女性はあんまり期待されなかった。でも、期待されると頑張ろうという気持ちにもなっていくので、今は期待が多い分、女性研究者はそれにこたえられるように頑張してほしいです。あとは、家庭と研究の両立、これから研究者として結婚して子供を生むとか、そういう問題も関わってくるけれども、これは両立できると思います。それは女性だけの問題じゃなくて、男性の問題でもあるので、理解のある良いパートナーを見つけることが非常に重要じゃないかと思います。

桜井： そうですね。やはり社会が私の若いころとは違ってきていると思います。そういう点では、女性が結婚して子供を生んで、かつ研究をして大学に勤める、あるいはどこかでポストを得て仕事を続けるということは、昔よりも楽になっているんじゃないかと思います。保育所などの数も増えているし、周りの理解というものもかつてより良くなっているから。だから、これからは子供も生んで、研究も続けていけ

ばよいと思います。結婚しなくたって子供は生めばいいと思う。そういう方法で生んだ子供を、男女のパートナーで協力して育てる。そういうふうな豊かな人生もあり得ると思います。

クリオ： 桜井先生、姫岡先生、力強いメッセージをありがとうございました。今回お話を伺って、先生方の歩んでこられた時代の精神や様々な出会いが、その時々先生方の女性史研究やジェンダー史研究のあり方と密につながっていることを強く感じました。後続の研究者として、先生方のメッセージを受け止め、自信を持って歴史学、そしてジェンダー史の研究を進めていきたいと思っています。

本日はご多忙の折にお時間をいただき、まことにありがとうございました。

2009年4月20日

東京大学・西洋史学研究室・教員談話室に於いて

訊き手：中込さやか

協力：阿部ひろみ、伊藤雅之、梶原洋一、田瀬望

姫岡 とし子（ひめおか としこ、1950年生）

専門は、ドイツ社会史、ジェンダー史。

東京大学大学院人文社会系研究科・文学部教授。

奈良女子大学理学部化学科卒業。フランクフルト大学歴史学部マギスター（修士課程）修了。奈良女子大学大学院人間文化研究科博士課程比較文化学専攻修了。文学博士。立命館大学国際関係学部教授、筑波大学大学院人文社会科学系研究科歴史・人類学専攻教授を経て、2009年4月より現職。

### 主要業績

#### 単著

『統一ドイツと女たち——家族・労働・ネットワーク』（時事通信社、1992年）

『近代ドイツの母性主義フェミニズム』（勁草書房、1993年）

『ジェンダー化する社会——労働とアイデンティティの日独比較史』（岩波書店、2004年）

『ヨーロッパの家族史（世界史リブレット）』（山川出版社、2008年）

#### 共著・共編著

『制度としての「女」——性・産・家族の比較社会史』（荻野美穂他と共著）（平凡社、1990年）

『近代を生きる女たち——19世紀ドイツ社会史を読む』（川越修・原田一美・若原憲和と共編著）（未来社、1990年）

『家族の社会史—シリーズ・変貌する家族1』（上野千鶴子他と共著）（岩波書店、1991年）

『21世紀のジェンダー論』（池内靖子・二宮周平と共編）（晃洋書房、1999年／改訂版、2004

年)

『グローバル化を読み解く 88 のキーワード』(西川長夫・大空博・夏剛と共編)(平凡社, 2003年)

『労働のジェンダー化——ゆらぐ労働とアイデンティティ』(池内靖子・中川成美・岡野八代との共編)(平凡社, 2005年)

『ジェンダー(近代ヨーロッパの探究)』(河村貞枝他と共著)(ミネルヴァ書房, 2008年)

『ドイツ近現代ジェンダー史入門』(川越修と共編)(青木書店, 2009年)

## 訳書

ウーテ フレーフェルト『ドイツ女性の社会史——200年の歩み』(晃洋書房, 1990年、若尾祐司他と共訳)

クロード・クーンズ『父の国の母たち——女を軸にナチズムを読む』(時事通信社, 1990年)

ジェフリー・ハーフ『保守革命とモダニズム——ワイマール・第三帝国のテクノロジー・文化・政治』(岩波書店, 1991年、中村幹雄、谷口健治と共訳)

イレーネ・ハルダッハ=ピンケ, ゲルト・ハルダッハ編『ドイツ子どもの社会史——1700-1900年の自伝による証言』(勁草書房, 1992年、木村育代他と共訳)

ダン・バルオン『沈黙という名の遺産——第三帝国の子どもたちと戦後責任』(時事通信社, 1993年)

オットー・ダン『ドイツ国民とナショナリズム——1770-1990』(名古屋大学出版会, 1999年、末川清・高橋秀寿と共訳)

## 論文

「ドイツの母性—過去と現在」「ドイツ統一とフェミニズム」原ひろ子・館かおる編『母性から次世代育成力へ—産み育てる社会のために』(新曜社, 1991年), 40-58, 287-301.

「都市大衆社会の生活と文化—家族と女性を中心として」望田幸男・木谷勤編『ドイツ近代史—八世紀から現代まで』(ミネルヴァ書房, 1992年), 123-137.

「東西ドイツの女性労働」原ひろ子・大沢真理編『変容する男性社会』(新曜社, 1993年), 88-108.

「ドイツ・ブルジョア女性運動と社会福祉：世紀転換期における母性ネットワークの形成」『寧楽史苑』38号(1993年), 61-81.

「ヨーロッパ統合と女性」西川長夫・宮島喬編『ヨーロッパ統合と文化・民族問題』(人文書院・1995年9月), 106-129.

Die "gute Ehefrau und weise Mutter"(Ryosai Kenbo)-Stationen auf dem Weg zur Emanzipation?, in: A.Schründer-Lenzen(Hg.), Harmonie und Konformität. Tradition und Krise japanischer Sozialisationsmuster, München 1996, 151-160.

「近代家族モデルの成立」川北稔編『岩波講座・世界歴史 1 7—環太平洋革命』(岩波書店, 1997年), 215-234.

「労働者のジェンダー化——日独における女性保護規定——」『思想』898号(1999年), 45-74.

“Die “betriebszentrierte Gesellschaft” und die Geschlechterverhältnisse in der Arbeitswelt Japans”, in: *Geschichte und Zukunft der Arbeit*, J.Kocka/C.Offe(Hg.), Frankfurt/M/New York 2000, 135-147.

「ドイツ統一十年とジェンダー」仲正昌樹編『ヨーロッパ・ジェンダー研究の現在—ドイツ統一後のパラダイム転換』御茶の水書房（2001年12月）

「女性・ジェンダーの近代」歴史学研究会編『歴史学における方法的転回——現代歴史学の成果と課題 I 1980—2000年』（青木書店, 2002年）、173-188.

“Work and Gender in the 19th and 20th Centuries—Japan and Germany in a Comparative Perspective of International Studies,” *Ritsumeikan Annual Review* 1(2002-1), 69-85.

「啓蒙の世紀」若尾祐司・井上茂子編『近代ドイツの歴史—18世紀から現代まで』（ミネルヴァ書房, 2005年）、29-52.

「新しい家族政策と『家族のための地域同盟』I ドイツの新しい家族政策」本沢巳代子・ベルント・フォン・マイデル（編）『家族のための総合政策—日独比較の視点から』信山社, 2007年、3-27, 187-194.

Changes in Family Structure, in: F.Coulmas/H.Conrad/A. Schad-Seifert/G. Vogt (eds.), *The Demographic Challenge: A Handbook about Japan*, Brill, Leiden 2008, 235-253.

#### 小稿

「ヨーロッパ：現代：ドイツ（一九九五年の歴史学界：回顧と展望）」『史學雑誌』第105編5号（1996年）、368-375.

「買売春」「母権制・父権制」「婚姻」『角川世界史辞典』（角川書店 2001年）

「欧米ジェンダー史」『歴史と地理—世界史の研究（206）』第591号（2006年）、42-46.

「2008年度歴史学研究会大会報告批判」『歴史学研究』No.848(2008年)、35-36.

桜井万里子（さくらいまりこ、1943年生）

東京大学名誉教授。専門は古代ギリシア史。文学博士。

国際基督教大学、東京教育大学文学部を卒業後、1971年に東京大学大学院人文科学研究科（西洋史学専攻）修士課程終了。東大助手、北大助手、東京学芸大学教授を経て、1996年に東京大学大学院人文社会系研究科教授に就任。2006年に同大学を退職。

主要業績（2003年の『クリオ』17号で掲載済みのものは除く）

#### 単著

『ヘロドトスとトゥキュディデス：歴史学の始まり』（山川出版社, 2006年）

『いまに生きる古代ギリシア』（日本放送出版協会, 2007年）

#### 論文

「ポリス社会の空間構造—アテナイにおける古典期アゴラの成立」『年報都市史研究（12）』（山川出版社, 2004年）

「ジェンダー史の方法—古代ギリシアの場合」『ジェンダー史学』創刊号（2005年）80-88

「古代ギリシア史研究の意義」『史海』54号（2007年）14-23

#### 共著・共編著

『古代オリンピック』（橋場弦と共編）（岩波書店, 2004年）

『ギリシア史（世界各国史17）』（山川出版社, 2005年）